

氏名(国籍)	エルダド・ナカル(イスラエル)		
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博甲第3048号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	“The Changing Same: Memories of WW II as seen through the Japanese Manga” (同じものの変容—日本のマンガを通して見られる第二次世界大戦の記憶)		
主査	筑波大学教授	博士(社会学)	駒井 洋
副査	筑波大学助教授	博士(社会学)	若林 幹夫
副査	筑波大学助教授		樽川 典子
副査	慶応義塾大学教授		浜 日出夫

論文の内容の要旨

本論文は、導入部をなす序章、理論的検討を通じて方法論を提示する第1章、研究の前提となる敗戦直後期の戦争の記憶の形成をめぐる政治的な抗争の歴史を概観する第2章、戦後日本の第二次世界大戦を物語の対象としたマンガ作品を具体的に分析する第3章、マンガにおける戦争の語り方の変遷を戦後日本社会の変容と関連付けて分析する第4章、以上の結果を理論的に考察する第5章、全体の結論を提示する結章から構成されている。

「Introduction 序」と題された序章では、戦後日本社会における第二次世界大戦の記憶の研究が今日盛んである一方で、日本で高度の発達・普及したマスコミュニケーションの形式であるマンガを系統的に辿り、そこで表現・構成されていった社会的記憶を分析した研究がこれまで存在しなかったことが指摘され、マンガに表現された第二次世界大戦の記憶の実態と歴史の社会学的分析という、この論文の基本的な問題意識が提示される。

「On Reconstructing the Past 過去の再構築について」と題された第1章では、社会の中で「過去」が想起・了解される方法には「歴史」と「記憶」が存在するが、普通言う「歴史」もまた記憶の編成の様式であることが、ニーチェ、フーコー、ル・ゴフ、ミルズらを参照しつつ第1節で示され、様々なメディアや場で表現され、共有される集合的記憶が現在の中に過去を現前させ、人びとを国民のような共同体に結び付けること、記憶することが常に何かを忘却することとセットになっていること等が第2節で論じられる。そして第3節では、この論文では歴史的记忆の連続性と非連続性の双方に注目したアプローチをとることが示される。

「On the Struggle to tell Japanese the Wartime History 戦時の歴史を日本人に語るための抗争」と題された第2章では、敗戦後から占領終了までの日本で第二次世界大戦をどのように語られてきたのかが、日本の敗戦時の物理的および社会的状況、政府の語り方、占領軍の語り方に関して検討され、この論文が対象とするマンガによる第二次世界大戦の表現が占領終了後に始まることが示される。

「Manga Remembers マンガは記憶する」と題された第3章では、戦後日本のマンガにおける第二次世界大戦の記憶の変遷が、1950年代末から1960年代末、1960年代末から1970年代末、1980年代から現在の三つの時期に分けられ、具体的な作品の表現に即しつつ紹介・分析される。第一の時期には、貸本マンガや少年マンガで、戦場を舞台に英雄的なパイロットたちが戦う作品が多く発表され、戦闘機の技術的な優秀さや、少年のようなパイロットたちの友情や勇敢さが協調される一方で、「敵」である他者たちの像は具体的かつ明示的に示されなかった。それに対して第二の時期には、普通の人間としての歩兵や非戦闘員の視点から戦争の悲惨さが描かれる作品が多く

見られ、女性の視点からの作品も現れる。そして第三の時期になると第二次世界大戦を直接対象とする作品はきわめて少なくなる中、戦争に対する視点自体を問いなおす作品が現れることが指摘される。

第4章「Mirror of Self 自己の鏡」では、第3章で紹介・検討された戦後のマンガにおける第二次世界大戦の表現が、集合的記憶という点から見ると何を示しているのかが論じられる。マンガが第二次世界大戦をほとんど扱わなかった1945年から1954年の時期は占領軍による検閲があっただけでなく、戦争と敗戦という出来事人びとが扱うことができるようにするために「時間的な距離を置く」期間であったとされる。それに対して1950年代末から1960年代末は復興の中で、過去を現在の復興や発展と結び付けるためのポジティブな記憶が編まれる時期であったことが、マンガにおける戦争の表現にも現れていると論じられる。また1960年代末から1970年代末は、復興を遂げた日本が冷戦や日中国交回復等の状況の中、一兵卒や非戦闘員の立場から戦争の悲惨さや暴力性を語ることで過去を再定義しようとした時期で、マンガにおける戦争の表現もそうした記憶の再編の中で変容していったとされる。そして1980年代以降には、国際的な政治・経済における日本の地位の向上と確立を背景に歴史の「見直し」が求められる一方で、マンガの読者の多くが戦後世代となったために第二次世界大戦が直接描かれることが少なくなり、それに対してフィクショナルな戦争を描く作品が現れてきたことが示される。また、マスコミュニケーションとしてのマンガをめぐる社会的な状況の構造の変化も、上記のような変化の背景にあることが指摘される。

「Frames of Memory 記憶の枠組み」と題された第5章では、集合的記憶を編成する社会的枠組みを、マンガなどのマスメディアが構成する「メディア・フレーム」と、それを受容する読者の側に属する「オーディエンス・フレーム」の協働的な相互作用という点から捉え、戦後日本のマンガにおける集合的記憶が社会構造の変化に伴って「神話的枠組み」から「世俗的枠組み」を経て、「脱構築的枠組み」に至っていること、それぞれの時代における「現在」がどのようなものであるかという「現在の枠組み」が集合的記憶の基本的な枠組みとなっていること、戦後日本のマンガにおける戦争の記憶の構築には昭和30年代と40年代という二つの密度の高い時期があったことが明らかにされる。

「Epilogue 結」では、ここまでの考察から、マンガというフィクショナルな表現と日本社会に関するより広範な言説や関心が相関したものであること、集合的記憶が社会の中の様々な表現領域に渡って複数存在すること、同じ出来事が記憶の中では枠組みと形を変えてゆくこと、日本における集合的記憶の研究においては歴史教科書等と並んでマンガという広範な読者をもつ表現領域への注目が重要であること等が確認される。

審査の結果の要旨

本論文が、戦後日本のストーリーマンガにおける第二次世界大戦の表現と、それぞれの時代のマンガと読者の関係、日本社会の状況を丹念に辿ることで、戦後日本の集合的記憶の一側面を明らかにしたことは高く評価される。一次資料を渉猟し、具体的な表現に即した考察を行うだけでなく、メディアと読者の関係を集合的記憶を構成する社会的枠組みという点から分析したことも評価に値する。80年代から現在にいたる時期の分析にはやや弱いところがあり、マンガの作家及び読者の世代論的な分析や、他のメディアや表現領域との相関関係等の分析と組み合わせることも望まれるが、それらは本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有しているものと認める。